魔法少女リリカルなのはStrikerS　古の契約者

ホーエン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　古の契約者

【Ｎコード】
Ｎ２６１６Ｎ

【作者名】
ホーエン

【あらすじ】
古の時代。数多の幻想なる存在達を率いる事が出来た一族がいた。たった一人で幾千万の軍勢に匹敵する力を持つことが出来た彼らを、時の権力者達は危険視し、歴史から抹消した。
時は流れ現代。広い次元世界を自由に旅する魔導師、ルークス。彼の本当の物語は、機動六課との出会いによって、静かに幕が上がるのだった。

プロローグ

――――気が付いたら、ボクは見知らぬ世界にいた。

どこだろうかここは。雨が降り続いている。空を見上げれば、厚く薄暗い雲が空を覆っている。

周りを見渡せば、朽ち果てた都市の群。戦争か自然災害か、ともかく破壊し尽くされた人工物の山だった。

「――――懐かしい魔力を感じたと思えば、よもやあの一族の生き残りとは、な。くっくっくっ……」

女の子の声がした。振り返ると、崩れた瓦礫の上に白いワンピースを着た赤い眼の少女が膝を組んで、楽しげに口元を歪めていた。

……だれ？

「さぁてな。誰だろうな。まぁいずれ知るだろうが、今はエルンとだけ名乗っておこう。ともかく、これでもはおれ。風邪をひくぞ」

そう言って、女の子はボクに大きな布を投げた。そういえばボクは服を着ていなかった。

「それにしても哀れだな。［棺］さえ壊れなければ、未来永劫、夢の世界で生きられたと言うのに……私も出来る事なら、ここでお前たちを眠りたかったよ」

女の子の言っている事はよく分からない。とりあえずマントを着た。意外とあったかい。

「まぁ、目覚めてしまったのなら仕方がない。契約により、生きていく術を教えてやるよ。何、安心しろ。私は優しい。懇切丁寧に手取り足とり教えてやる。世界の正義を語る時空管理局とやらを壊滅できるぐらいの力を、な」

女の子が瓦礫から軽い足取りで降りてくる。近づいてきて分かった。彼女は雨に濡れていない。不思議と彼女の周りだけ、雨が避けているようだった。

「さて、まずはここから離れるか。お前の服を見繕って、その後は我と同じように暇をしている連中と結ばせてやろう。付いて来い」

女の子がボクを通り越して、歩いていく。ボクはとりあえず女の子に付いていくことにした。

「そうだ。一応、聞いておこう。お前、名前を覚えているか？」

な、まえ？

「そうだ。名だ。覚えているか？」

……ルークス。ルークス・――――

「その先は言うな」

女の子は真面目な顔でボクの言葉を阻んだ。

「歴史の闇に消えたとはいえ、痕跡は残っているだろう。生涯、家名は口にするな。――――いや、違うな。お前と共に人生を歩む人間にだけ教えてやれ。一番信頼していると言う証として、な」

最期のほうは少女は笑って告げた。

「ルークス。覚えておけ。契約とは言え、我は慈善でこんな事をしているわけではない。見返りのモノがあるからだ」

なにか……欲しいの？

「ああ。欲しい。お前の人生がな。何、難しく考えるな。お前はお前が思うように生きていけばいい。我はただ、お前を観察したいだけだ」

瓦礫の山を進む。足に刺さる破片が痛い。

「人間の人生ほど、愉快なモノはない。我はそれを見るのが好きだ。それが我が主となるべき男の人生なら、な。……はっはっはっ。感謝するぞルークス。この百年、暇をしなくてよさそうだ」

女の子の笑い声が響く。

それを聞きながら、ボクは思う。

ボクが覚えているのは名前だけ。それ以外は何も思い出せない。

ボクは何故、ここにいたんだろうか。

この女の子は一体誰だろうか。

何も分からないまま、女の子の後を追う。

ただ、一つ分かった事がある。

この女の子は悪い子じゃない。

プロローグ（後書き）

始めて投稿しますホーエンと申します。

私も読者の皆様も楽しめる作品を作っていきたいと思いますので、

長いおつきあいをよろしくお願いします。

プロローグ2

「なのはぁ……しっかりしろなのはぁ！！！」

しんしんと降り続ける雪の結晶。白く染まっている大地の上で、血まみれの仲間を抱きかかえ、泣き叫ぶ少女の姿があった。

「なのは、目ぇ閉じんなよ！　絶対に眠んなよ！　医療班、何してんだ。早く来いよぉ！！」

悲痛な声が雪の世界に響き渡る。

――――誰が見ても、鉄槌の騎士ヴィータが抱きかかえる少女、高町なのはの傷は重傷だった。

なのはの白い防護服は赤く染まり、所々焼け焦げている。だらりと垂れた両腕には力はなく、流れ出る赤い液体は彼女から体温と命の灯を奪い、白い大地を赤く染めていく。

「ヴィ……タ、ちゃ……」

「喋んな！　じっとしていろ。意識だけちゃんと持ってろよ！――――医療班、速くしろぉぉーーーー！！　こいつが……なのはが死んじまうだろぉ！！！」

ヴィータはあらん限りの声で叫ぶ。

だが、通信越しに帰ってきたのは無情の言葉。どんなに急いでも、十分は掛かると言う事。

駄目だ。間に合わない。

ヴィータは絶望的な気持ちになる。この出血量にこの傷。今、この場に治療専門の魔導師がしても助かるか分からないほどの重傷なのに。

「なのは。死ぬんじゃねぇぞ！　絶対に死ぬんじゃねぇぞ！！」

今、ヴィータにできるのはこれだけ。彼女の傷口を抑え、流れ出る出血を出来る限り抑えて、彼女の意識を失わないように話しかける事だけ。

「だ、い……じょ……だ、よ……ちょっ、と、しっ……」

「だから喋んな。頼むから喋らないでくれ！！」

悲痛の声で懇願する。眼には既に涙がにじみ出ている。

こうやって抱きかかえているから分かる。ゆっくりと確実に彼女の鼓動が弱まっていくのを。

「嫌だ……嫌だ……」

失うのは嫌だ。

悲しみの螺旋から逃れ、未来へと歩んでいるのに、それを導いて

くれた親友とも言うべき、この少女を失うのは嫌だ。

「頼む。誰でもいい……何でもする……こいつを……なのはの助けてくれぇーーーー！！！」

なのはの体を強く抱きしめ、ヴィータは叫んだ。

意味がない事は分かっている。現実は非情だ。だが、叫ばずにはいられなかった。

だが、もし――――――。

もし、この場になのはを助けてくれる存在が居るなら、ヴィータは何でもする気でいた。どんな不等な契約でも、結ぶ。奴隷になれと言われれば、喜んで奴隷になる。この少女を助けられるなら。

と、ぼすっと雪を踏みしめる音が背後から聞こえた。

「――――――酷い傷だな。大丈夫……そうじゃないな」

ヴィータが振り返った。

そこには金髪碧眼、汚い外套と大きな荷物を背負った少年が立っていた。

「誰だ……お前は……」

「ただの旅人だよ。広い広い次元世界を雲のように自由気ままに旅する旅人さ」

そう言って、少年は背負っていたリュックをどさっとその場に置き、軽い足取りでヴィータに近づいた。

「近づくな！　それ以上近づいたら……」

ヴィータは慌てて、アームドデバイス［グラーフアイゼン］を手に取り、少年の足取りを阻むように突き出した。

「……そんな事をしている場合じゃないだろう。その子、死んじゃうぞ」

半眼、呆れたような顔で言う少年に、ヴィータは慌ててなのはに視線を落とす。

「なのはっ！？」

さっきより命の鼓動が弱くなっていた。確実に死に近づいている。

「結構、重傷だな……今から治癒魔法をすればあるいは……」

いつの間にか少年はヴィータの隣りで片膝をついて、なのはの傷の状態を確かめていた。

「お前、治癒魔法使えるのか？」

「一人で旅をしてきたからね。それなりだと自負しているよ」

「――――頼む！　何でもする。だから、こいつを……なのはを助けてくれ！！　頼む！！」

ヴィータの懇願の声に、少年はにやりっと口元に笑みを浮かべる。

「当然だよ。こんな可愛い女の子を死なすなんて、オレには出来ない。――――でも、ちょっと時間が経ち過ぎているな。それに君も結構、傷が深いみたいだし……よし、シロ、出てこい」

少年は背後の荷物に向かって、声を掛けた。

すると大きな荷物がごそごそと動き、隙間から白くふわふわした何かがこちらにぴょんぴょん跳ねながらやってきた。

「な、何だよそれ？」

傍にやってきたソレを見て、ヴィータは戸惑ったような表情を浮かべた。

体は野球ボールより少し大きいぐらいだろうか。白い毛並みに覆われた丸っこいソレは大きくくりくりとした眼でヴィータをじっと見ていた。言って見れば、ＵＦＯキャッチャーの景品のような動物だった。

「そうだ。名前は？」

「ヴィ、ヴィータだ。それよりも早くなのはの治療を――――！！」

「安心しろ今やる。それとヴィータ。一応、先に謝っておくよ。ごめん」

「なにを――――――――――」

と、ヴィータが尋ね返そうとした瞬間、傍にいた白い物体が突如として何十倍にも膨れ上がり、大きく口を開いたのだ。

「なっ！？　えっ！？　ちょっ――――――――！？」

ぱくん。

と、白い何かはヴィータとなのはを食べてしまった。

「よし。それじゃあ頼むよシロ」

少年はシロと呼んだ正体不明の生物を見上げながら、言った。

シロは丸っこい大きな体を前後ろに動かす。それは彼は了承の合図だった。

「シロ、そろそろいいか？」

洞窟の中。シロは器用にまた体を前後に動かした。

「よし、じゃあ出して」

げろっと、何やらシロは粘着性のある液体と共にヴィータとなのはを吐きだした。

物の見事にネトネトのぐちょぐちょになっている二人。その道の方々なら泣いて喜ぶ姿となっているが、あいにくこの少年にはそんな趣向はない。

「お～い、ヴィータ。起きろ～」

ぺしぺしと、地面に仰向けに倒れているヴィータの頬を叩く。

「うっ、あ――――お、お前！　さっきのは――――「痛いところあるか？」――――痛いところだと！？　んなもんねぇよ！　それよりもさっきの、は、い、ったい……あれ？」

痛みがない？

怒りのゲージが急激に収まり、ヴィータは眼をぱちくりして、自分の体を触った。何やらネトネトする液体に全身が浸されているが、痛みがない。それどころか傷が一つもなかったのだ。なのは程ではなかったが、自分も確かに負傷した筈なのに。

「ふむ。ヴィータは完治だな。さて、あの子のほうはどうかな？」

「そうだ。なのは！！」

ヴィータははっとして、少年の胸ぐらを掴んでいた手を離し、傍で自分と同じ状態になっているなのはの具合を確かめた。

ヴィータと同じように傷がなかった。防護服こそ赤く染まっているが、その下にある肌には傷一つなく、なのはは穏やかな呼吸を繰り返していた。

「一体……何をやったんだよお前……」

「礼ならシロに言ってくれ」

「シロ？　って、何だそりゃあ？！」

少年の声に反応し、顔を向けて時、ようやく気付いた。

彼の背後に、妙に愛らしい二つの眼がついた白い巨大な綿飴がでんっと居座っていたのだ。

「お前を治してくれた恩人だぞ。シロ、元に戻ってくれ」

風船から空気が無くなる様に急速に萎むシロ。そしてヴィータが始めてみた時と同じサイズになったシロは、ぴょんと少年の頭の上に着地した。

「こいつの体液は、特別でな。どんな傷でもかなり速いスピードで治せるんだ。他にも滋養強壮、お肌つるつるの美容効果もあるぞ」

「……だからって、あんな方法を取るのか？　喰われたのかと思

ったぞ」

「でも、結果は良かっただろう。ヴィータの大切な友達はこうして山を乗り越えた」

そう言って、ぱんぱんと膝を払い、傍においてあった大きな荷物を背中に背負う少年。

「んじゃあな。ヴィータ。その子によろしく言っておいてくれ。後、傷がないと言っても、内部に残っている場合があるから、半年ぐらいは無理な運動や魔法は使うなって言っておいてくれ」

「おっ、おい、どこ行く気だよ？」

「雲の流れるまま気のままに。オレは旅人だからな。また旅をするの」

ざっと一歩踏み出す少年。

「ちょっ、ちょっと待ってくれよ。このまま私たちの部隊と合流しないか？　お礼もしてねェし……」

「別にいいさ。また会う事があったら、その時にしてくれ。それにオレは組織って言うのがどうにも苦手でね。それじゃあ、またどっかで会おうなヴィータ」

ひらひらと手を振って、入口へと歩いていく少年。

「おま……お前、名前は！？」

「ルークス。性は理由あってない。職業、旅人だよ」

そう言って、金髪碧眼の少年ルークスは洞窟から出て行った。

残されたヴィータは、とりあえず部隊の人間に連絡を取る為、転がっていたグラーフアイゼンを手に取る。

「……ルークス、か」

小さく呟く。

その名はしかと、自分の心に焼き付けた。

大切な人を助けてくれた恩人の名前として。

プロローグ2（後書き）

なのは達と絡ましてみました。
この次から本編に移動です。近い内に上げますので、お待ちください。

第一話

「新デバイスでぶっつけ本番になっちゃったけど、練習通りで大丈夫だからね」

既に飛び立った輸送ヘリの中。時空管理局本局遺失物管理部［機動六課］スターズ分隊隊長高町なのはは壁際に備え付けられた椅子に座る新人メンバーに励ましの言葉を贈った。

不安がないと言えば嘘になるが、確かな感触をなのはは掴んでいる。

自分と、親友のフェイト・T・ハラオウンが見出した新人たち。彼らなら問題なく事件を解決してくれるだろうと信じている。

ほんの十分前、突如の緊急アラートが鳴り響き、機動六課部隊長八神はやては前線メンバーに出動の命令を下した。

ヘリが向かう先は、エイリム山岳丘陵地区を走る山岳リニアレール。この山岳リニアレールの貨物車両に最優先確保対象のロストロギア［レリック］が積まれている事が判明したのだが、既にレリックを狙うカプセル型の機械、通称［ガジェット］が襲撃。山岳リニアレールは乗っ取られ、暴走状態にあるのだ。

今回の出動の目的は、この山岳リニアレールの停止と貨物車両にあるレリックの確保だ。

「はい」

「頑張ります」

スターズ分隊に所属する魔導師、ティアナ・ランスターとスバル・ナカジマはすぐさま返事をする。だが、声は硬い。初めての実戦なので緊張するのは当然のことだ。

「エリオとキャロ、それにフリードもしっかりですよ！」

「はい」

「はい」

「きゅくる～」

ライトニング分隊所属エリオ・モンディアルとキャロ・ル・ルシエ、そしてキャロの使役竜フリードを励ますのは、妖精と言っても差し支えのない小さな少女、機動六課ロングアーチ所属のリィーンフォース？。

「危ない時は、私やフェイト隊長、リィンがちゃんとフォローするから、おっかなびっくりじゃなくて、思いっきりやってみよう」

「「「「はい！」」」」

フォワード陣の強い返事に、なのはは満足げに「うん」と頷いた。

（実戦……そういえば、あの人と一緒にいた時以来かな……）

キャロは視線を落として、在る人物の事を思い出した。

ル・ルシエの一族から追放され、行く場所も分からず、帰る場所を失い、彷徨っていた時に出会った金髪碧眼の旅人。自分より大きな荷物を背負って、どんな時でも屈託なく笑っていた人。

旅人は本当に楽しい人だった。

一緒にいた時間は短かったけど、つまらなかった時間はない。毎日毎日が楽しかった。

朝は、二人で食料確保の為に山を歩いて木の実を取ったり、魚を取ったりした。

昼は一緒に魔法の練習をした。休憩の合間を見ては色んなところに行って、遊んでいた

夜は夜で旅人の冒険談を聞いて、胸を躍らせた。あまりにも面白くて、楽しくて、眠くなるのが嫌だった。

「くすっ……」

自然とキャロの口元に笑みが生まれた。

やっぱりあの旅人の事を思い出すと、心が軽くなって楽しくなる。もう一度会って、昔のようにキャンプをして、遊んで、冒険談を聞きたい。

（そういえば、あの人とお別れする時は辛かったな……）

一ヶ月半近く経ったある日、旅人は辛そうな顔でキャロに別れを切

り出した。

どうやらかなり危険な場所に行く為、キャロとこれ以上、一緒にいられないと言ったのだ。

わんわん泣いた。捨てられたと思った。

また自分は一人ぼっち。再び帰る場所を失った。

だけど、旅人は部族の人達と一つだけ違った。泣いているキャロにあるモノを手渡した。

『これはオレが大事にしている宝物の一つだ。預かっていてくれ。オレは必ずキャロに会いに行くから、その時に返してくれ』

渡されたのは小さな蒼く輝く宝石。竜を使役する一族の人間ならだれでも知っているモノ。

［竜の涙］。

ほとんど取れる事のない、希少価値の高い結晶体。オークションに出れば、一般管理局員では到底、手が届く事のない高価なモノ。

『キャロ、お前がオレの［帰る場所］になってくれ』

そうして、キャロは旅人と別れ、管理局に保護される事になった。

管理局に保護され、フェイトと出会うまでの時間はキャロにとって、辛い時間だった。竜召喚と言う希少技能能力を持っていると言うのに、制御できない使えない魔導師。大人の冷酷な目が、言葉がキャ

ロの心を何度も穿ち、ヒビを刻みつける

でも、ひそかに忍ばせた竜の涙を握りしめて、旅人の言葉を思い出して、自分を奮い立たせた。

「きゅっくる〜……」

「大丈夫？」

目の前には不安げに見詰めるフリードリヒ、隣に座るエリオは心配そうな顔でキャロを見ていた。

「あっ、ごめんなさい。大丈夫」

不安にさせてしまった二人を安心させる様に、ちょっとぎこちない笑みを浮かべて答えたキャロ。

（そうだ。暗い気持じゃダメ。まずは明るくポジティブに考えて、そして――――）

私の力と、フリードの力を信じる。

キャロはそっとポケットに忍ばせた竜の涙を握りしめ、気持ちを切り替えた。

――――同時刻。

機動六課の面々が向かう山岳リニアレールの貨物車両の中。

「随分と揺れんな……まぁ、いいや。コンロどこ入れたっけかな〜」

腰まで伸びた金髪を揺らしながら、旅人がごそごそと荷物を漁っていた。傍にはインスタントラーメンのカップと水が置かれていた。

のんびりと昼食の準備をしている旅人の背後で、ガジェットは静かに接近していた。

機動六課の新人メンバーが山岳リニアレールに取り付いた頃、旅人は空きコンテナの物陰に隠れて、突然、現れたガジェット達を観察していた。

（う～む……）

じ～っと旅人は実に興味深く、ガジェットを見つめていた。

多くの次元世界を渡り歩いてきたが、あんなモノは見た事がなかった。誰かの発明品にしても、一度解体して、どんな構造になっているのか確かめてみたい。

数はそこそこいるが、旅人の実力なら問題なく捕獲出来る。しかし、何故か彼はしなかった。

理由は簡単。彼が最も頼りとする自分の直感が告げているのだ。

（う～む……な～んか厄介そうな、それでいて良い事が起きそうな感じがするんだよな）

相反する感覚に戸惑い、どうするか悩む旅人。

その間にもガジェットは、コードの触手を動かし、次々にコンテナを漁っていく。

（よし、ここはオレらしくないが、様子見だな。数は多そうだし、後から動いても一機ぐらいなら捕獲できるだろう。……しかし、旅費をケチってこんな事になるとは……やっぱりオレの人生って波乱万丈だよな……うむ、重畳なり）

波乱万丈万歳。変化のない日常より、激しい変化の在る日常こそ、自分の住処。

にんまりっと笑みを浮かべた直後、鈍い振動と爆発音が響いた。

（ん……何か大きな魔力を感じるな。戦闘しているのか？　となると、出てくるのは管理局か騎士団だよな。やばい！　見つかったら留置所に拘留される！！　予定変更、とっとと逃げなくて……あれ、この魔力の感じ、どっかで感じた事があるようなないような……）

宙を舞うエリオの体。新型ガジェットの触手攻撃で気を失い、まるでゴミのように車外に放り出された。

だが、直ぐに勢いを失い、眼も眩む程の高さの崖へと真っ逆さまに落ちていくエリオ。

「エリオ君！」

キャロは何の躊躇も迷いもなく、山岳リニアレールの天井から飛び降りた。

失っちゃだめだ。大切な人を。

その気持ちだけで、キャロは断崖絶壁に飛び出したのだ。

だが、それを観測していたロングアーチの面々は青ざめた。

二人に飛行能力はなく、高所からのリカバリー方法なんて習得していない。ロングアーチの面々にして見れば、自殺とも取れる行動だったからだ。

だが、司令官である八神はやてと副官のグリフィス・ロウランは違った。よくやったと言わんばかりに、口元に笑みを浮かべ、「いや、あれでええよ」と言った。

「あっ、そうか！」

と、通信担当のシャーリー・フィニーノが納得したように笑顔を浮かべた。

「そう、発生源から離れればＡＭＦが弱くなる。使えるよ、フルパフォーマンスの魔法が！」

高町なのはが嬉々とした声で言った。

下から上へと物凄い勢いで流れていく岩肌。近づいてくる渓谷。全身に吹き付ける風。大人でもこの状況に陥れば、死の恐怖に負け、泣き叫ぶだろう。

だが、少女に恐怖はなかった。あったのは強い決意だけ。

『オレの個人的な見解だけど、召喚魔法ってのは他の魔法と違って、召喚獣と言う相方と心を通わせて始めて真価を発揮する魔法なんだ』

キャロは手を伸ばす。先には気を失い、重力に従って墜ちていく大切な人。

頭に響くのは、一族を追い出され途方に暮れていた少女を励まし、

僅かな時間だが楽しくて思い出深い記憶を作ってくれた青年の声。

『召喚者が召喚獣を信じなきゃ、召喚獣は従わないし、協力しない。逆に召喚獣はこの人なら力を貸してもいい、主と認めてもいいと言う召喚者にならなきゃだめだ。いいか、キャロ。まずはフリードを信じろ。そしてフリードに自分を認めさせて、一緒に魔法を使うんだ。そうすれば、恐れることなんてないだろう？　巨大な力も一人じゃ使いこなせないなら、二人で使いこなせ。お前なら出来るさキャロ』

くしゃりと屈託なく笑う青年の笑顔。

手が届く。しっかりとエリオの右手を掴んだ。

《Ｄｒｉｖｅ　ｉｇｎｉｔｉｏｎ！》

キャロのグローブ型ブーストデバイス［ケリュケリオン］が高らかに、待ち望んだような声で言った。

瞬間、キャロの体に魔力が行き渡り、キャロとエリオを包み込むように桃色の領域が出現する。

「フリード。不自由な思いをさせててごめん。私、出来るから。フリードと一緒なら出来るから！！」

あの人の言葉を信じて。自分の力を信じて。フリードを信じて。今、キャロの本当の力が目覚める。

「行くよ。――――竜魂召喚！」

桃色の領域は神域へ。キャロの眼下の下に巨大な召喚魔法陣と、環状魔法陣が出現する。

「蒼穹を走る白き閃光。我が翼となり、天を駆けよ。来よ、我が竜フリードリヒ。竜魂召喚！」

高らかに、力強くキャロは叫ぶ。

召喚魔法陣より出でるは、雄大な銀の翼を持つキャロの忠実な従者。口蓋より放たれた雄たけびは渓谷に響き渡り、その姿を現実へと表す。

「……」

エリオはただ、茫然と事を成り行きを見つめた。

とても綺麗で神秘的で。ただ、眼を離さずに見つめ続けた。

白銀の竜［フリードリヒ］。今、その真なる姿を機動六課の面々に刻みつけた。

「あれが……チビ竜の本当の姿……」

リィンフォースと合流したティアナ・ランスターは、そのあまりの迫力に茫然とした。

「かっこいい……」

スバルは無邪気に目を輝かせて、フリードの姿を見つめる。そして、近い内、キャロに頼んでその背中に乗せてもらおうと思った。

（……やっぱりキャロも……）

と、ティアナはどこか寂しそうな、それでいて悔しそうな眼でその姿を追った

（私だけ、か……）

「あっちの二人にはもう救援はいらないですね。さぁ、レリックを回収するですよ」

リィンの言葉に、ティアナは頭を切り替え、スバルと共にレリック確保へと向かった。

その後はとんとん拍子で事が運んだ。

新型ガジェットはキャロの援護もあってエリオが仕留め、レリック

は無事、ティアナ・スバルのチームが確保した。

弛緩していく空気。戦闘も終わり、無事、任務を終えた面々に喜びの表情が彩る。

そして、スバルが作り出したウイングロードを歩きながら、スバルとティアナがたわいもない談笑をしながらヘリに向かっている最中。

『上空から高速に接近する物体あり！　みなさん、気を付けて！！』

シャーリーの言葉に、弛緩していた空気が一瞬で硬直する。なのはは素早く上空を見上げ、敵を見つけた。だが、気付くのが少し遅すぎた。

「っ！？」

相手は飛行型ガジェットだが、攻撃方法が体当たり。狙いはフリードに乗るエリオとキャロ。推力を全開に振り絞り、なおかつ真上から降下と言う事で落下スピードも相まって、かなりの速度で接近していた。

なのはは素早く攻撃態勢に入る。間に合うか、間に合わないかの瀬戸際。

その時。

「――――エンキドゥ。握り潰せ」

スバル達の背後からそんな声で響いた。

瞬間、空間に見た事のない召喚魔法陣が出現し、何か巨大な物体が物凄い勢いで伸び、フリードに体当たりしようとしていたガジェットは握りつぶされた。

「岩の……腕？」

エリオは茫然と、空を見上げて呟く。そう。出現したのはごつごつとした岩で構成された巨大な腕だった。腕は役目を終えたのか、出てきた時とは対照的にゆっくりとした動作で召喚魔法陣の中に消えていった。

「これって……あの人が見せてくれた部分召喚？　――――そんな、まさか……！？」

「――――前に言わなかったかな。キャロ。戦闘が終わった直後が一番危ないんだぞ。遠足と同じだ。家に帰るまで気を抜かない事だ」

スバルとティアナが振り返る。

そこにはいつの間にか、黒と白の防護服を纏った金髪碧眼の青年が立っていた。

「あっ……ああ……」

「キャロ？」

キャロは眼を大きくして、現れた青年を見つめていた。その表情にあるのは喜び。

「キャロの……知り合い？」

「貴方は一体……」

スバル、ティアナが眼を丸くして、青年を見つめる。

「人呼んで、さすらいの旅人だ。――――キャロ」

スバル、ティアナにそう答えてから、再びキャロを見上げる青年。

「久しぶりだな。元気にしていたか？」

「はい……はい……！　ずっと待ってました。それと、会いたかったですルークスさん！！！」

「ああ。オレも会いたかったぞキャロ」

屈託のない満面の笑顔でルークスは答え、キャロも負けないぐらいの笑顔を浮かべて答えた。

「ルー……クス？」

ふと、なのはの脳裏によみがえるヴィータが言った言葉。

『なのは。瀕死のお前を治してくれたのはルークスって奴だ。覚えとけよ。命の恩人なんだから』

「……そうだ。私を助けてくれた人の名前がルークス……！　あ、あの……！」

「ん？」

と、ルークスの視線がなのはに向く。

「八年前、私を助けてくれたのは貴方ですか？！　ヴィータちゃんが言っていたルークスさんって、貴方の――――？！」

「ヴィータ……。懐かしい名前を聞いたな。元気か……って、ん？　ん～……」

しばしなのはをじっと見つめ、こめかみに指を置いた考え込むルークス。

そして思い出したように眼を開けた。

「あっ、もしかしてあの時の白い服の女の子？！」

「そうです！　じゃあ、私を助けてくれたのは貴方なんですね！」

宙に浮いていたなのはは慌ててウイングロードに降りて、スバルとティアナを通り越して、ルークスに近づいた。

「ルークスさん。本当にありがとうございます。ルークスさんがい

なければ私は……」

「気にする事はない。それよりも元気になってよかった。体の調子は大丈夫なの？」

「はい。後遺症もなく元気です」

「そうか。……それにしても、驚いたな」

と、なのはの顔をじっと見た後、苦笑いを浮かべるルークス。

「えっ、どうかされたんですか？」

「うん。どうかしたよ。まったく」

そう言って、肩をすくめるルークス。そして――――。

「あの時から可愛い子だなとは思っていたけど、まさかここまで綺麗な女になるなんてな～。いや、本当……一度、デートをお願いしたいぐらいだよ」

屈託のない子どもっぽい笑顔を浮かべて、なのはを真っすぐ見据えて言った。

御世辞はごまんと聞いた。

しかし、何故かルークスの言葉は、溶け込むようになのはの心の奥まで響き、思わず赤面した。

『……何者でしょうか？　この男……』

通信モニターに映る女性は眉を潜めて、中継映像を映し出している巨大な空間モニターの前で思案する白衣の男に尋ねた。

「さてね。ただ、随分と面白い魔法を使うようだね。彼女たちと言う残滓と言い、この部隊は実に面白い」

白衣の男は興味深く映像を見つめている。そしておもむろに手元のコンソールを操作して、映像を拡大。画面一杯にエースオブエースと話す青年が映る。

（――――何故だろう。この男、とても気になる。少し調べさせてみるか……）

男の使った魔法は実に面白いものだった。召喚獣の部分召喚魔法など聞いた事もない。第一、そんな事が可能なのか？　ただでさえ、通常の魔法と異なり、高い制御と複雑な術式を用いるのに。

「ウーノ。彼の事を少し調べてくれ」

『分かりました。情報が集まり次第、報告します』

ウーノと呼ばれた女性の空間モニターが閉じる。

「……何はともあれ、実に面白い……心が躍るな。ふっふっ……」

薄暗く広い空間に、男の笑い声が木霊した。

第一話（後書き）

ん～、ちょっと無理やりな感じもしますが、これでようやく本当の意味でのスターとなります。

ある程度、物語を進めたらキャロとの出会いのあたりを書こうと思います。

第二話

「お久しぶりです。カリム」

「ええ。最後に会ったのは一年ぐらい前だったかしら。本当に久しぶりねルークス」

聖王教会の重鎮にして、時空管理局理事官を務める麗しき金髪の淑女、カリム・グラシアはにこやかに微笑み、流浪の旅人ルークスを自室に招き入れた。

「こちらにどうぞ。今、シャッハが美味しいお茶を持ってくるから」

「お気遣い感謝します」

普段のお気楽かつ馴れ馴れしい態度が嘘のように、慇懃無礼に頭を下げ、ルークスは言葉を返した。

荷物を部屋の角に置き、カリムの案内で窓際のテーブルに座った。

「ルークス。さっそくだけどあなたの旅の話を聞かせてくれないかしら？」

カリムは期待に満ちた、そして待ちきれない表情で言った。

とある事件を経て、この流浪の旅人と知り合った麗しき淑女は、ある意味では彼の虜になっていた。

人間的に尊敬出来るし、何より彼の傍は心地よかった。どんな時で

も前向きでポジティブ。落ち込んでいても、いつのまにか笑顔になって、落ち込んでいたことが馬鹿馬鹿しく思っている自分がいた。

共に過ごした時間は少ないが、それでもルークスと言う存在はカリムの中にはっきりと焼き付いている。

「そうですね。それじゃあどの旅の話をしましょうか……う～ん、悩みますね～」

ルークスが唸り声をあげ、どの話がカリムを楽しませるのかと考え込む。

だがその必要はない。

ルークスの話はカリムにとって、すべてが楽しませるものであり、自由の象徴だった。

自分の生まれ持った能力のせいで、カリムはある意味では聖王教会に自由を奪われていた。ほとんどの時間を教会の敷地で過ごし、出られたとしても常に護衛がいて、息苦しかった。

幼い頃、自由に大空を舞う小鳥が羨ましかった。

小鳥は様々な場所に言って、様々なものを見て聞いて、感じている。広い世界がある。

だが、自分にはない。あるのは小さな部屋と、もう見慣れてしまった風景。狭い世界だけ。

それが嫌で辛くて、一人で泣いたこともあった。しかし、成長する

に連れ、自分の能力の重要性を理解していった。それが多くの危機を回避する助けになるかもしれない事を実感した。

だから諦めた。だから目を逸らした。自分には届かないモノだと判断した。

しかしある日、ルークスと出会い、彼を知り、彼の旅の物語を聴くことでそれは手に届くモノであることを知った。

ルークスは熟練の語り部のように、表現が豊かで伝えるのがうまかった。

旅の話を聞いていると、目や耳や鼻にその感覚が伝わってくるほどだった。

そう、カリムはルークスの旅の物語を聞く事で自由の渇望を解消したのだ。

「そうだ。未管理世界で見た風景の話をしましょうか。私が見た風景の中でもベストスリーに入るほどの神秘的な風景の話を……」

「ぜひ聞きたいわ！」

カリムは満面の笑みで答える。恐らく一般男性なら、一撃で虜になってしまうような心奪われる笑顔だった。

「それは私も聞きたいですね」

と、ドアが開けられ、ティーセットを持ったカリムの付き人シャッハが入ってきた。

「おっ、久しぶりシャッハ。元気にしてた～？」

「はい。ルークスも元気そうで何よりです」

ルークスは何故か、カリムにだけ丁寧な口調で話す。理由は何故かそうしたほうがいいオーラがカリムにはあるとの事なのだが、カリムは当初、これをかなり嫌がった。

どうにも壁があると感じたからだそうだが、話し合いの結果、それがないことが分かると、不思議と気にならなくなった。

「騎士カリム。私も同席してもよろしいでしょうか？」

「もちろんよシャッハ。でも、その前にお茶をお願いね」

「はい。ルークスはコーヒーでいいですか？」

「分かってるじゃない。さすがはシャッハ。いいお嫁さんになるよ」

「その言葉、ありがたく頂戴しますよルークス」

ふふっと笑って、シャッハは紅茶を注ぎ始めた。

最初こそ、彼のストレートな言葉に慌てふためき、ごまかしで怒ったこともあるがそれも今では慣れた。

恥ずかしがることはないのだ。受け入れてやる気持ちで彼の言葉を聞けば、心に静かに溶け込んでくる。

「では、話しましょうか。あれはある森に入った時なんですが……」
お茶の準備が整ったのを気に、ルークスが思い出しながら言葉を紡ぎ始めた。
それはどんな物語にも負けない自由と冒険の物語。
カリムとシャッハは時間を忘れて、その物語を聞いた。

「はぁ……やっぱりルークスの旅の話は心が躍ります」
至極ご満悦な表情でカリムは言った。
やはり彼の旅は波乱に満ちていて、興味が尽きない。どんな小説家が産み出した物語よりも、彼の旅のはるかに興奮する。
「確かに。やはり次元世界は広いですね」
シャッハも同じような表情で頷いた。
「では、カリムも一緒に旅をしますか？」
どこか意地悪そうな笑顔を浮かべたルークスに対して、カリムは苦笑した。

「行きたいのは山々ですが、私はここを離れられません」
「それは残念だ。望めば直ぐにでも行動したのに」
「ルークス。お願いですから前みたいな騒ぎはやめてくださいよ」
何を思い出したのか、シャッハは酷く疲れた表情で言った。
「ははっ。冗談だよ冗談。俺だってもうあんな事は勘弁だよ。いやー、オレも若かったね～」
「ルークス。その言葉はまだ早いと思いますが」
「そうかな？　まっ、実際の話、オレは自分の年を知らないしね。見た目が若いだけで、実はカリムより年上だったりして」
けらけらと世間話をするかのようにルークスは言った。
そう、ルークスは自分の年齢を知らない。だが、それを不憫に感じた事はない。
ぶっちゃけて言えば、自分の正体よりも広い次元世界を旅する方が何倍も興味があるのだ。それにルークスの考え方では、今が楽しければそれでよしなのだ。
「どうでしょうか……。実際は私と同じか、クロノ提督ぐらいじゃないでしょうか？」
「クロノ提督？　誰ですかその方は？」

「時空管理局本局時空航行部隊に所属されているクロノ・ハラオウン提督です。たまに聖王教会に来られますよ」

「若いのに提督ね～……なぁシャッハ。提督ってえらいのか？」

「次元航行艦一隻に、大隊を持つ権限を与えられていますので、かなり上ですよ」

「そりゃあご立派だ。一度会ってみたいね。ああ、そうだ。シャッハ。悪いけどまた換金してくれるかい？」

思い出したかのように立ち上がり、部屋の隅に置いてある大きなバックパックを開け、ごそごそと漁り始めるルークス。

「また何か発見されたんですか？」

「まぁね。今回はなかなかの大物だと思うよ。たぶん聖遺物の一つだと思うんだ」

様々な世界を旅するルークスは、まだ考古学者達が発見していない未知の遺跡などを発見する事が多い。そして未知の遺跡ほど、ルークスの興味が湧く場所はない。

遺跡を探検して、気に入った発掘品や財宝を見つければ回収して、聖王教会や考古学学会に売りつけて旅の資金を稼いでいるのだ。

「ほら、これなんだけど……」

バックパックの中から取り出し、テーブルの上に置いたのは古ぼけ、

所々壊れた手甲だった。

「私が見る限り……ただの防具にしか見えないのですが……」

カリムがじっと見つめた後、そんな感想を洩らした。

「オレも最初はそう思ったんだけど、裏を返せば……この紋章、見た事無い？」

「これは……覇王イングヴァルトの紋章ではないですか！？」

シャッハが目を大きく開けて、思わず声を上げた。

「あっ、やっぱりか。前にシャッハに見せて貰った聖王紋章の本にこれと同じマークがあったのを思い出してさ、持って帰ってきて正解だな」

「これが本物なら大発見ですよ！　ちょっと聖遺物管理部に行ってきます」

「ええ。お願いね」

「はい。では、失礼します」

シャッハは頭を下げ、部屋を退出する。数分もしないうちに、大興奮の聖遺物管理部の連中と共に戻ってくる事だろう。

「ルークス。お金のほうは聖遺物管理部が調査した後でいいかしら？」

「ええ。それで結構です。ミッドチルダに用事がありますし、気長に待ちます。後、カリム。発見者に関してはまた名前を伏せておいてください」

「分かっているわ。また流浪の旅人の持ち込みだと記載しておくように伝えておきます。でも本当にいいの？　これだけ多くの発見をしているのに、それを公表しないなんて……」

ルークスが聖王教会に持ち込んだゆかりの品はかなりの数になる。中には今のように崇拝する聖王に関するモノまで様々だ。本来なら、ルークスは発見者として歴史に名を残してもいいほどの働きをしているのだが、ルークスはあえてそれを放棄しているのだ。

「歴史に名を残す事も、名誉にもあまり興味はありません。オレはただ広い次元世界を自由に旅をする。それだけがしたいバカですから」

にっこりと笑顔で言ったルークス。

何の嘘偽りのない綺麗な顔に、カリムはそれ以上言うのをやめた。

「あっ、そういえば用事があるって、誰かに会うのかしら？」

「ええ。昔別れた妹のような女の子に会いに。キャロ・ル・ルシエ。今は機動六課と言う部隊で世話になっているそうなのですが、ご存知でしょうか？」

山岳リニアレールでの事件で再会を喜びたかったのだが、ちょうどルークスには重要な用事があったため、後日、六課に挨拶しに行くと言ってそのまま別れたのだ。

「あら……それはまた何て奇遇かしらね」

こんな偶然があるのだろうか。まさか自分が後景人である部隊に用事があるとは。

と、そこでカリムにある考えが浮かんだ。これはチャンスかもしれない。

「ルークス。頼みがあるだけど聞いてくれるかしら――――」

「一つの場所に留まるのは好きじゃないけど、カリムの頼みなら仕方ないか」

聖王教会の中庭でごろりっと寝転がりながら、ルークスは呟いた。

カリムからのお願いとは、しばらくの間、機動六課に所属して力を貸して欲しいとの事だった。旅をすることが何より大好きなルークスとしては、一つの場所に長く留まる事はあまり好きではない。そんな事をしている時間があれば、少しでも未知の世界に足を踏み入れたい。

だが、今回は資金面で何かと色を付けてくれるカリムからのお願いだ。おいそれと断ることなど出来ない。よってルークスは久しぶりに一つの場所に留まることを決意したのだ。

「まぁ、キャロもいるし。たまには『おい、ルークス』――――っと、やっとお出ましか」

突然、ルークスの頭に声が響いた。ルークスはあまり驚かず、目を瞑り、頭に響く声に集中した。

『連絡が遅いぞ。エルン』

『お前と違って、私は忙しいんだ。で、どうだった？』

（やっぱ、何か焦りみたいなモノを感じるな）

基本的にエルンは挑発的な口調だ。だが、今の彼女にはそれがない。

ルークスはそれが不思議で仕方なかった。

一体、何を焦っているのだろう。彼女自身、恐れるものなど何もないはずなのに。

『エルンの言っていた現象は確認できたよ。異常発達した木が何本もあった』

『そうか。やはりな……ちっ』

忌々しげに舌打ちをするエルン。

『なぁ、エルン。一体何をしているんだ？　探し物なら手伝うけど？』

『お前には関係のない話だ。お前はさっさと旅に出て、私の無聊を慰めろ』

『その件なんだけど、しばらく旅はなし。一年ほど、ミッドチルダに居座ることにしたから』

『なに？　どういうことだ？』

『どうもこうもない。カリムに頼まれてね』

『カリム……ああ、”集計者”の娘か。そんな協力など……いや、ルークス。それに協力しろ』

エルンの意外な言葉に思わず、「えっ？」と言葉が漏れかけた。

『珍しいな。エルンがそんな事を言うなんて。てっきり、「知ったことか。私との契約を優先しろー！」とか言って怒鳴ると思ってたのに』

『気紛れだ。たまにはいいだろう。じゃあなルークス。一つの場所に留まっても、私を楽しませろよ』

一方的に念話が切れた。

ルークスは眼を開け、エルンの不自然な態度に首をかしげた。

だが、いくら考えてもエルンの考えなど理解できる筈もない。

「まぁ、何とかなるだろ」

ルークスは考えるのをやめ、青空を見上げた。

文明が崩壊し、残骸しか存在しない世界。

朽ち果てた都市の一角に、淡く輝く光があった。

赤い瞳の少女の前には大きな水滴のような物体が浮かんでおり、それが淡い光を放っている。表面に眼を凝らしてみると、何かの文字が刻まれ、時たま消えては別の文字へと変わっていた。

「お前たちは引き続き足取りを追え。絶対に見つけだせ」

少女――――エルンは暗闇の背後に向け、言った。すると何かが一斉に動き、ざわざわとした音を残して気配を消した。

「ちっ、厄介なモノが残っていたものだ。まったく、どこで見つけたかは知らんが、人間とは全くもって愚かな生き物だ」

吐き捨てるように言葉を紡ぐ。

人間は自らの業で滅ぶ。それを何度も少女を見続けてきた。

愚かしい生き物。だが、他の生き物にはない輝きを持つのもまた人間だ。

「アレが自分達には過ぎたるモノだとなぜ気づかん。そうまでして滅びの道を歩むのか？　全くもって度しがたい程の愚かさだ」

エルンは光を放つ水滴から視線を外し、二度と晴れることのない暗雲の空を見上げる。

「……まだ”母”からの干渉はない、か。急がねばな」

だが、それもいつまでか。

今、自分がしていることは、明らかに自らの存在に課せられた役目から離れている。もし、”母”に知られれば干渉を受け、拘束されるだろう。

（くくっ、私も甘くなったものだ。何だかんだ言って、人間を助けようとしている……）

これもあれも全て、あいつのせいだ。

ルークスと言う人間と出会い、共に時間を過ごしたお陰で再び、人間に興味が出たのだ。

「まぁ、悪くはないな」

エルンは口許に笑みを浮かべ、どこか楽しげに呟いた。

第二話（後書き）

久方ぶりの更新となります。

この後、いよいよ機動六課に合流します。

なんか、二か月も放置して反省しています（ＴＴ）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2616n/

魔法少女リリカルなのはStrikerS　古の契約者

2010年10月10日23時24分発行